

佐賀方言における疑問標識 「こっちゃい」に関する覚え書き

日高俊夫

1 はじめに

東京方言における(1)のような文はYesNo 疑問文とWH 疑問文の解釈の両方が可能である(Takahashi, 1993) のに対して、それに相当する佐賀方言¹の(2)の文は基本的にYesNo 疑問文としてしか解釈されない。

(1) ケンはマリが誰に会ったか今でも知りたがっているの？(YesNo / WH)

YesNo 疑問文に対する答：うん、知りたがっているよ。/ WH 疑問文に対する答：ヒロシだよ。

(2) 佐賀方言：ナオヤはマリがだいに会うたか今でん知りたがととと？(YesNo / *WH)

YesNo 疑問文に対する答：うん、知りたがととるよ。/ WH 疑問文に対する答：*ヒロシばい。

西垣内・日高 (2010, 2013) は、この現象を両方言におけるWH 素性と焦点素性の含意関係の違いとして分析し、Deguchi and Kitagawa (2002) の疑問文のスコープと焦点イントネーションのドメインの関係性に基づき、Ishihara (2004) の補文標識C による派生的な焦点素性[+F] の付与のメカニズムを用いて、その解釈の違いを論じた。松井(2011) は、その考え方を応用し、Pierrehumbert and Beckman (1988) のモデルを用いてPF における具体的なメカニズムを提案している。

西垣内らの研究は、いずれも佐賀方言の疑問補文標識として「か」を用いて分析している。確かに、佐賀方言では「か」も用いるのだが、佐賀方言話者である筆者の感覚からすれば、「か」は東京方言からの借用である感が否めない。実際、佐賀方言においては疑問標識として「こっちゃい」という語が存在する。本稿は、その「こっち

¹ 本稿で言う「佐賀方言」とは、いわゆる無アクセント方言に分類される、佐賀市を中心とした地域で話される方言のことを指す。

ゃい」を東京方言の疑問標識と比較しながら、「か」「かどうか」「やら」との類似点と相違点を明らかにし、それが両方言の間接疑問文の意味や構造にどのような影響を与えるかということについて見通しを立てることを目的とする。

2 「こっちゃい」の基本的な使い方

まず、簡単に「こっちゃい」の例を見てみよう。

(3) a. ケンが「日本酒こっちゃいウイスキーばくるっ」て言うたけん、おいは日本酒ばもろうてきた。

(ケンが「日本酒かウイスキーをあげる」と言ったので、僕は日本酒をもらってきた。)

b. おいん財布はどけいったこっちゃい。(僕の財布はどこにいった{のか / (の) やら}。)

c. ケンは試験に通ったこっちゃい。(ケンは試験に通った{のか(なあ) / (の) やら}。)

d. ケンがどけ行ったこっちゃい知らん。(ケンがどこに行った(の){か / やら} 知らない。)

この例を見る限り、「こっちゃい」は東京方言の疑問補文標識「か」もしくは「やら」と対応するように見える。

以下ではこの「こっちゃい」について、その成り立ちや統語的、意味的性質を観察する。

3 成り立ち

形態的に見てみると、「こっちゃい」は東京方言における「ことやら」に相当し、「ことじゃい」から派生していると思われる(ただし、後述するように、佐賀方言話者としては「こっちゃい」はそれ以上形態素に分解できない語であるという直感はある)。

まず、この中の「じゃい」についてであるが、佐賀方言では必ずしも「こと」につけなくても「じゃい」が単独で用いられることも多く、ほぼ東京方言の「やら」あるいは「か」に相当する((4a)の各例は「どがんしたこっちゃい」のように「じゃい」を「こっちゃい」に変えても意味の違いは感じられない)。

- (4) a. どがんしたじゃい（どうしたやら）、どけいったじゃい（どこに行ったやら）、
なんぼしたじゃい（何をしたやら）
- b. どがんじゃいした？（どうかした？）、どがんじゃいこがんじゃいして（どう
にかこうにかして）、きたじゃい（来たか）、くっじゃい²（来るか）、こいじ
ゃいあいじゃい（これかあれか/ これやらあれやら）、なんじゃいかんじゃい
（何やかや）

ちなみに、佐賀方言では、(5) のようにラ行の音が「イ」になる現象や、(6) のよう
な母音融合がひろく観察される。

- (5) a. ほい（掘）、いもほいにいった（芋掘りにいった）、くすい（薬）、みずたま
い（水溜り）
- b. こい（これ）、あい（あれ）、そい（それ）、どい（どれ）
- c. ～すんない（～するなら）
- (6) a. きゃーもん（買い物）、やしゃー（野菜）、しゃー（菜：おかず）、きゃー（貝）、
じゃーこん（大根）
- b. しーか（すいか、酸っぱい）、きーもん（食べ物）、ちーた（着いた）

促音化も多く見られる。

- (7) a. すっ（する）、くっ（来る）、ぬっ（寝る）、とっ（取る）
- b. すっと？（するの？）、くって（来るって）、ぬっかねー（寝ようかね）、と
っとっ（取っているんだよ）

ヤ行の/ji/の発音も残っている。

- (8) いえいご(/jejigo/)（英語）、ひゃくいえん(/hjakujen/)（百円）

² これにさらに「きゃん」をつけて「くっじゃいきゃん」になると「来るだろうか」の意味にな
る。その場合、「きゃん」は「かなあ」程度の意味を表す。

このような現象を考え合わせると、「ことじゃい」が「こっちゃい」になり、それが「ことやら」に相当するというのはある程度妥当性があると思われる。ただし、母語方言話者としての直感からすると「こっちゃい」はそれだけで単独の語を構成していて「こと」「じゃい」に分けられるという感覚はない。実際インターネットの方言解説でも「こっちゃい」は一語として扱われている。

- (9) 佐賀弁では「〇〇するかどうかわからない」というとき、「〇〇すっこちゃい³、せんこっちゃいわからん」といいます。そのほかの使い方としては、
「お父さんはどこいきんさったと？」（お父さんはどちらに行かれたのですか？）
「どここっちゃいわからん。」（どこなのかわからない。）
「そい、なん？」（それは何ですか？）
「なんこっちゃいわからん。」（何なのかわからない。）
どがん使うこっちゃい、わかんさったろうか？
(<http://www12.plala.or.jp/sagaben/015.html> 太字は筆者)

- (10) 【標準語】俺が、これかそれをあげるっていったけど、あなたがいらんって言ったからそれはもう捨てたよ。
【佐賀弁】おいが、こいこっちゃいそいぼくるっていうたぼってんが、あさんがいらんっていうたけんがそいはもう捨てたばん。
(<http://thebbs.fc2.com/146160/> 太字は発表者)

特に、「どここっちゃい」（どこ(なの)か)、「こいこっちゃいあいこっちゃい」（これかあれか)のような「こっちゃい」がほぼ「か」に相当する例においては「ことやら」に置き換えることができない(*どこことやら、*これことやらあれことやら)ので、基本的に一語として扱ってよいのではないかと思われる。
また、単独の「じゃい」の場合、「こいじゃいあいじゃい」が「これかあれか」と「これやらあれやら」の両方の意味を表せるのに対して、「こいこっちゃいあいこっちゃい」は「これかあれか」の選言的意味しか表せない。

³ インターネットにおける表示をそのまま用いているので、ここでは「こっちゃい」ではなく「こちゃい」となっているが、これは単なる表記の誤りであると思われる。

次節からは、この「こっちゃい」の具体的特性を分析していく。

4 補文内の「こっちゃい」—「か」との類似点と相違点

(3) の例から単純に考えると、「こっちゃい」に比較的近いと思われ東京方言は「か」もしくは「やら」のようであるので、まずは「こっちゃい」と「か」「やら」の意味や振舞いを比べてみたい。結論から先に言うと、「こっちゃい」は形態的には「ことやら」に相当するのだが、振る舞いを観察してみると、補文内では、どちらかといえれば「か」に近い性質を示すと言える。

4.1 格助詞との共起

高宮(2004)によれば、「か」の間接疑問文が格助詞を伴うことができるのに対して、ヤラの間接疑問文は格助詞を伴うことがない。

- (11) a. 何人がパーティーに出席するか{ ϕ /を}覚えていない。
b. 何人がパーティーに出席するやら{ ϕ /*を}覚えていない。(高宮, 2004, 123)

「こっちゃい」の間接疑問文は、「か」と同様、基本的に格助詞を伴うことができる⁴。

- (12) a. 何人がパーティーに出席すっこっちゃい{ ϕ /ば}覚えとらん。
b. 何人がパーティーに出席すっこっちゃいが大事かと(よ)。
cf. 何人がパーティーに出席するかが大事だ。/*何人がパーティーに出席するやらが大事だ。
c. 何人がパーティーに出席すっこっちゃいは問題じゃなか。
cf. 何人がパーティに出席するかは問題ではない。/*何人がパーティーに出席するやらは問題でない。

ただし、(11)や(12)のような不定詞疑問文でない場合、東京方言においては、(13)が示すように、「やら」はたとえ格助詞を伴わなかったとしても若干容認性が落ちる。

⁴ 格助詞を伴わない方がより自然であるが、伴ったとしてもさほど違和感はない。また、佐賀方言における「ば」は、東京方言の対格を表す「を」に相当する。

- (13) a. ケンがパーティーに出席するか{ ϕ /を}覚えていない。
b. ケンがパーティーに出席するやら{? ϕ /*を}覚えていない。

佐賀方言においては、不定詞疑問でない場合は、格助詞がつくと容認性が落ち、格助詞がない方がより自然である。これは「か」とは異なる性質であると言えるだろう。

- (14) a. ケンがパーティーに出席すっこっちゃい{ ϕ /?*ば}覚えとらん。
b. ?*ケンがパーティーに出席すっこっちゃいが大事かと(よ)。
c. ?*ケンがパーティーに出席すっこっちゃいは問題じゃなか。

不定詞疑問でない場合、次のように「どがんこっちゃい」を加えれば、格助詞を伴っても問題なく容認される。

- (15) a. ケンがパーティーに出席すっこっちゃいどがんこっちゃい{ ϕ /ば}覚えとらん。
b. ケンがパーティーに出席すっこっちゃいどがんこっちゃいが大事かと(よ)。
c. ケンがパーティーに出席すっこっちゃいどがんこっちゃいは問題じゃなか。

この「どがんこっちゃい」の「どがん」は、ほぼ東京方言の「どんな」あるいは「どう」に相当する。

- (16) a. どがん自転車の欲しかと？（どんな自転車が欲しいの？）
b. どがん人の来んさったと？（どんな人がいらっしやったの？）
c. 駅さんはどがん行くぎよかですか。（駅へはどう行けばいいですか？）
d. もうどがんでんされん。（もうどうにもできない。）

したがって、「どがんこっちゃい」は、形態的には、東京方言で表せば「どんなことやら」に相当するのだが、(15)の文を東京方言に直してみても意味を成さない。

- (17) a. *ケンがパーティーに出席することやらどんなことやら{ ϕ /を}覚えていない。
b. *ケンがパーティーに出席することやらどんなことやらが大事なんだよ。

c. *ケンがパーティーに出席することやらどんなことやらは問題ではない。

むしろ、「～こっちゃいどがんこっちゃい」という表現は、東京方言の「かどうか」に相当しそうである。実際、(15) の文を「かどうか」を用いて東京方言に直すとほぼ同じ意味を表すことができる。

(18) a. ケンがパーティーに出席するかどうか{ ϕ /を}覚えていない。

b. ケンがパーティーに出席するかどうかが大それたよ。

c. ケンがパーティーに出席するかどうかは問題ではない。

また、高宮(2004)は、「か」の疑問詞が格助詞を伴い、補充節として機能している場合には潜伏疑問文 (Concealed Question) と共起できないことを指摘している。

(19) *何人がパーティーに出席するかを人数を覚えていない。(高宮, 2004, 122)

これはいわゆる二重ヲ格制約の可能性があるが、次のように二重ヲ格を避けても容認性は向上しない。

(20) *何人がパーティーに出席するかを人数が知りたい。

「こっちゃい」もほぼ「か」と同じ振る舞いを示す。

(21) a. *何人がパーティーに出席すっこっちゃいば人数ば覚えとらん。

b. *何人がパーティーに出席すっこっちゃいば人数の知りたか。

以上をまとめると、佐賀方言の「こっちゃい」は、間接疑問文の補文内では、東京方言の「やら」よりも「か」に近いといえる。しかし、(どちらかといえない方が自然ではあるが)「か」と同様に基本的に格助詞を伴うことができるという共通性がある一方で、不定詞疑問文でない疑問文が補文になった場合は、佐賀方言では格助詞をとりにくくなるという違いがある。その場合は「どがんこっちゃい」を加えれば格助詞が問題なく生起できるようになり、ほぼ東京方言の「かどうか」に対応する。

4.2 主節述語の意味的制限

高宮(2004)によれば、「やら」の間接疑問文の主節述語には未決の意味を表すものしか現れない一方で、「か」にはそのような意味的制限がない。

(22) a. 何人がパーティーに出席するか{覚えていない / 覚えている / 尋ねた}。

b. 何人がパーティーに出席するやら{覚えていない / *覚えている / *尋ねた}。

(高宮, 2004, 123-124)

一方、「こっちゃん」の間接疑問文の主節述語には「やら」の場合のような意味的制限はないので、その点では、やはり「か」に近いものと分析できそうである。

(23) 何人がパーティーに出席すっこっちゃん{覚えとらん / 覚えとっ / 尋ねた}。

また、(22)、(23)の主文の動詞はfactiveな補部をとる動詞（「覚えている」）か不定詞疑問文を補部にとる動詞（「尋ねる」）であるかであったが、そのような性質がない動詞の場合、「か」も「こっちゃん」も容認しにくいように思われる。

(24) a. ケンはナオミにマリがパーティーに出席するか?*(どうかを){言った / 伝えた / 連絡した / 手紙に書いた}。

b. ケンはナオミにマリがパーティーに出席すっこっちゃん?*(どがんこっちゃん){言うた / 伝えた / 手紙に書いた}。

このことは「やら」にも共通する。

(25) *ケンはナオミにマリがパーティーに出席するやら{言った / 伝えた / 連絡した / 手紙に書いた}。

これらの動詞は単に伝達の意味を表すもので、「覚えている」のように補文の内容が真であることを前提とする訳でもなければ、「尋ねる」のように補文の内容の真偽値そのものを問題にしたり不定詞疑問をとったりするものでもない。そのような動詞の場合、「か」や「こっちゃん」、「やら」は共起しにくいのに対して「かどうか」や「こっちゃんどがんこっちゃん」は問題なく生起できる。これは「覚えている」や「尋ねる」の場合、動詞そのものが補文の意味タイプを比較的厳しく制限しているので、

動詞と補文の結びつきが強いのに対して、「言う」や「伝える」の場合はそれが弱いので、新たに「どうか」や「どがんこっちゃい」をつけることによってその結びつきを強めているのかもしれない。その傍証として、補文内が不定詞疑問であれば、「言う」や「伝える」でも「どうか」や「どがんこっちゃい」なしで補文をとることができる。

(26) a. ケンはナオミに誰がパーティーに出席するか(を) {言った/ 伝えた/ 連絡した/ 手紙に書いた}。

b. ケンはナオミに誰がパーティーに出席すこっちゃい(?ば) {言うた/ 伝えた/ 手紙に書いた}。

ただ、この場合でも、(26b) が示すように、佐賀方言の場合、格助詞を伴うと若干違和感が生じる。

以上の振る舞いを見てみると、「こっちゃい」は、その形態的類似性とは裏腹に、「やら」よりもむしろ「か」に近いが、格に関する統語的性質は「か」とも若干異なるようである。

4.3 格と補文内の名詞

(26b)が示すように、佐賀方言では、主文述語のタイプによって格助詞がとりにくくなるという事実を観察したが、「こっちゃい」を伴う補文を含む疑問文では、補文内の名詞句の性質によっても格助詞の生起しやすさが左右されるようである。

まず、補文が不定詞疑問文でない場合、(27c) のように、補文内の名詞が「その本」等の定的な名詞句であればほぼ問題なく容認されるのに対して、不定名詞句の場合は、(27a) が示すように若干容認性が落ちる。さらに、(27b, d) が示すように、どちらの場合も格助詞を伴うことができない。

(27) a. ?ケンはナオミが本ば買うたこっちゃい知ととと？

b. *ケンはナオミが本ば買うたこっちゃいば知ととと？

c. ケンはナオミがその本ば買うたこっちゃい知ととと？

d. *ケンはナオミがその本ば買うたこっちゃいば知ととと？

一方、東京方言では、(27) に相当する文は全て容認可能であり、格助詞も問題なく共

起できるように思われる。

- (28) a. ケンはナオミが本を買ったか知ってるの？
b. ケンはナオミが本を買ったかを知ってるの？
c. ケンはナオミがその本を買ったか知ってるの？
d. ケンはナオミがその本を買ったかを知ってるの？

佐賀方言においては、補文が格を担うにはWH 句の存在が必要になる。

- (29) ケンはナオミがなんば買うたこっちゃい(?ば) 知ととと？

この場合、対格の「ば」を入れると若干不自然になるものの、容認しにくいというほどではない。一方、東京方言では、(29) に相当する文は問題なく対格と共起することができる。

- (30) ケンはナオミが何を買ったか(を) 知ってるの？

5 主文の「こっちゃい」と「か」「やら」—「やら」との類似点

前節までで、補文における「こっちゃい」は、相違点はあるものの、東京方言の「か」とある程度類似していることを観察した。ところが一方、「こっちゃい」が主文で用いられると「か」とは異なる振る舞いを示し、「か」よりもむしろ「やら」と類似する性質を持つように思われる。

(31a) が示すように、「か」は相手が眼前にいる場合に相手のことを尋ねる疑問文で使用できるのに対して、「やら」はそれと同じ使い方ができない(「#」は、同じ意味では使えないことを示す。この場合、自問としては使用可能であろう)。また、(31b) が示すように、主語が三人称である疑問文の文末に「か」を用いる場合、「行ったのか」のように「の」がないと容認しにくいのに対して、「やら」は「の」がなくても容認可能である⁵。

- (31) a. 君は大阪に行った(の) か？

⁵ この場合、疑問を強調する副詞「果たして」や「一体」をつけて「{果たして/ 一体}ケンは大阪に行った(の) やら」とするとよりすわりがよくなるように感じられる。

- cf. #君は大阪に行った(の) やら。
- b. ケンは大阪に行った?* (の) か？
- cf. ケンは大阪に行った(の) やら。

前節では補文の中の「こっちゃん」がほぼ東京方言の「か」に相当することを観察したが、主文ではむしろ「やら」と似た振る舞いを示す。

- (32) a. #あさんな大阪さい行った(と) こっちゃん。
- b. ケンは大阪さい行った(と) こっちゃん。

(32a) は、「やら」と同じように、眼前の聞き手に対する疑問文では使用できないことを示しているし⁶、(32b) では東京方言の「の」にあたる「と」が必要ないことも「やら」と平行している。

また、不定詞疑問文における振る舞いも「やら」に平行する。

- (33) a. 私の財布はどこにいった?* (の) か。
- cf. 私の財布はどこにいった(の) やら。
- b. おいん財布はどけいった(と) こっちゃん。

この場合も、「こっちゃん」は「やら」と同様に、東京方言の「の」に相当する「と」がなくても容認性が落ちることはない。

6 まとめと今後の展望

これまでに観察してきたことをまとめると、次のようになる。

- (34) 主文では「こっちゃん」は「やら」と並行的な振る舞いを示す。
 - a. 眼前の相手のことを尋ねるのには使えない。
 - b. 名詞化標識の「の」にあたる「と」がオプションである。

⁶ 佐賀方言における二人称代名詞の「あさん」は相手が眼前にいる場合にしか使えないように思われる。

(35) 補文内では、「こっちゃい」は「か」とある程度並行的な振る舞いを示すが、相違点もある。

- a. 基本的に格助詞を伴うことができる。
- b. ただし、不定詞疑問でない場合は格助詞があると「か」と異なり容認性が落ちる。（「か」と同様に、）「やら」と違い「未決の意味を表す主節述語としか共起しない」という制限はないが、単なる伝達を表す「言う」等の主動詞の場合は「どうか」に相当する「どがんこっちゃい」が必要。
- c. 「言う」等の主動詞の場合、「か」と異なり、不定詞疑問を補文にとっても格助詞を伴いにくい。
- d. 補文が不定詞疑問でない場合、「か」と異なり、不定の名詞が生起すると若干容認性が落ちる。
- e. 補文が不定詞疑問でない場合、「か」と異なり、格助詞を伴うことができない。
- f. 補文が不定詞疑問であって、動詞が「知っている」のような **factive** なものであっても、格助詞を伴うと若干容認性が落ちる。

特に、「こっちゃい」が補文の中で使われた時には、格助詞の表出が東京方言ほど自由でないことは注目に値する。これは、佐賀方言では補文が主文の動詞にとって完全な項となっていないことを示唆しているのではないだろうか。

歴史的に見れば、間接疑問文は注釈節を含む2文が接続している構造から派生している（高宮(2004)、衣畑(2007)）。「こっちゃい」を含む佐賀方言の補文の格助詞表出に様々な条件がかかるということは、その節全体が格を担いにくい、すなわち注釈節に似た性質を持っているということではないだろうか。つまり、佐賀方言の「こっちゃい」を含む間接疑問文は、東京方言に比べて、完全な補文構造を持つ段階には至っていないのではないかと考えられるのである。

本稿では、佐賀方言の「こっちゃい」は、補文中では東京方言の「か」にある程度相当するものの、相違点もあるということを確認し、それが佐賀方言の間接疑問文が完全な補文構造をなしていないことを示唆しているのではないかと述べてきた。もしこれがある程度正しいとすれば、様々な方言における疑問の補文標識とそれが導く補文の性質を考察することによって、間接疑問文の発達過程の様々な段階あるいはタイプを明らかにできる可能性があるのではないかと考える。

参考文献

- Deguchi, M. & Kitagawa, Y. (2002). Prosody and Wh-questions. In Hirotsu, M. (Ed.), *Proceedings of the Thirty-second Annual Meeting of the North Eastern Linguistic Society*, pp. 73–92.
- Ishihara, S. (2004). Prosody by Phase: Evidence from Focus Intonation Wh-scope Correspondence in Japanese. In S. Ishihara, M. S. & Schwarz, A. (Eds.), *Interdisciplinary Studies on Intonation Structure 1*, pp. 77–119. University of Potsdam.
- Pierrehumbert, J. & Beckman, M. (1988). *Japanese Tone Structure*. The MIT Press.
- Takahashi, D. (1993). Movement of *wh*-Phrases in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory*, 11, pp.655–78.
- 衣畑智秀(2007). 「付加節から取り立てへの歴史変化の2つのパターン」. 『日本語の構造変化と文法化』, pp.65–91. 東京：ひつじ書房.
- 高宮幸乃(2004). 「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立：不定詞疑問を中心に」. 『三重大学日本語学文学』, 15, pp.124–111.
- 西垣内泰介・日高俊夫(2010). 「Wh 構文の解釈と韻律構造」. 『日本言語学会第141 回大会予稿集』, pp. 272–277. 日本言語学会.
- 西垣内泰介・日高俊夫(2013). 「Wh 構文の解釈と韻律構造—佐賀方言と東京方言の対象—」. *TALKS*, 16, pp. 99–116.
- 松井理直(2011). 「音韻部門における統語的焦点素性の韻律解釈」. *TALKS*, 14, pp. 45–80.